# JICA中国教員代表団来日

## 友愛山荘で合宿セミナーなど

◇

JICAの青年招へい事業により中国青年代表団一〇〇名が五月十七日から六月十三日の日程で来日した。中国青年代表団は、青年指導者グループ、経済グループ、公務員グループ、教員グループ（それぞれ二十五名）で構成されており、当協会は教員グループ二十五名を担当した。

来日した青年は、まず共通プログラムで日本についての一般的な知識をつけた後、分野ごとに分かれる都内プログラムに入った。

当協会が計画から実行までを委託された都内プログラムでは、教育機関に固執せずに幅広い分野の施設見学ができるように工夫した。実際の都内プログラムの詳細は以下のとおりである。

◇

5／24創価大学・東京純心女子大学視察

都内プログラムでは教育施設として二つの大学を訪問した。両校の協力のお陰で、日本の教育現場を詳しく見学できた上に、日本の学生や教員の方との交流も図ることができた。

5／25文部省・参議院議員会館訪問／国会議事堂見学

午前中に文部省を訪問し、「日本の教育制度について」というテーマで講義を受けた。その後、参議院議員会館に移動し、石田美栄参議院議員に「民主党三十人学級法案について」のご講演をいただいた。また、公務ご多忙の折にも関わらず、当協会の理事である民主党代表の鳩山由紀夫先生、当協会評議員の小川勝也先生にも懇談する機会を設けていただいた。夕方には、鳩山会館の離れにて日本の茶道を体験、引き続き歓迎パーティーが盛大に催された。

5／26～28合宿セミナー

二泊三日の合宿セミナーは、中国青年とほぼ同数の日本青年の参加を得て、軽井沢友愛山荘にて行われた。長野県小諸市の散策や温泉体験、スポーツ交流、グループディスカッション、餃子作りなど盛り沢山の内容であった。また、地元のご婦人方のご厚意で三味線や日本舞踊も披露され、相互の肌の触れあう交歓が行われた。日本の伝統文化の一端に触れ、中国青年に大変好評であった。

5／29自主研修日

終日中国青年の自由行動。

5／30東芝府中事業所・サントリー工場の見学

日本の最先端技術を駆使した工場として東芝府中事業所を訪れ、エレベーターや鉄道関連製品の製造ライン、コンピューターサーバー施設の見学を行った。

午後は、サントリー武蔵野ビール工場にてオートメーション化されたビールの製造過程について説明を受け、できたてのビールの試飲で見学を締めくくった。

◇

都内プログラムを無事終了した青年は、地方プログラムのため高知県に移動した。地方プログラムでは、高知県知事の表敬訪問や、小学校・中学校・高校・大学の視察、伝統工芸の体験として和紙作りなどが行われた。

鳩山由紀夫先生と中国青年達

合宿セミナー／全体発表会の様子

### 交流は国境を超える　参加者の声

友愛山荘における総勢五十名の合宿セミナーは充実した内容で楽しく、大成功であった。私は以前に中国を訪問し現地の人々と交流した際に、「交流に国境は関係ない」と感じた感動を思い出した。

国際交流といっても異文化を学びに相手国へ行くのと、相手を母国に受け入れるのとでは違う点で学ぶことも多かった。合宿参加者は各々できる範囲で、そしてそれぞれの方法で交流していたように思う。その姿勢がとても自然で感動した。相手を受け入れる際に互いの相違点、共通点を認めあいながら相手を理解しようとしていた。それが同時に自分をも省みる機会となったため、合宿後に「視野が広がった」と言う参加者が多かったのではないかと思う。

参加者の数だけ、感動や新発見があったであろう。私はバスケの試合中に「トウ、トウ」と言われて投げたボールがゴールに綺麗に入った瞬間、言葉が通じなくても周りの気持ちがひとつになるのを感じた。

国境を超えた今回の交流を一期一会で終わらせることなく、それぞれの感動と共に今後の関係につなげていきたいと考えている。

（宮崎奈々子）


友愛

題字・鳩山威一郎

機関紙「友愛」
発行所
㈶日本友愛青年協会
〒112-0002　東京都
文京区小石川１-10-13
松本ビル２F
TEL　03-5684-3188
FAX　03-5684-3186
発行人：川手正一郎
編集人：長田正太郎

隔月１回　10日発行

購読料
年額　3.000円


## クーデンホーフ・カレルギー伯の友愛思想

深津榮一

No 2

クーデンホーフ・カレルギー伯と実際に会った経験をもつ深津先生による連載の第二回目。今回は、「スターリンの死」というタイトルで全体主義国家の弊害について教えていただく。

### 『スターリンの死』

#### 全体主義国家の正体とは

クーデンホーフ伯の「永久平和不可能論」に驚いたことは前回でふれたが、もう一つ私をびっくりさせたことがあった。

それは、スターリンは、暗殺」された、ということであった。もちろん、私はそのことをくわしく話してくれるようお願いした。

周知のようにスターリンは一九五三年三月五日に死んだ。（もっとも、死んだことになっている、と書いた方がよいということもあり得る）私のクーデンホーフ伯訪問は一九五六年だから、スターリンの死からまだ三年余りすぎたばかりで真相は明らかでなかったし、レーニンにはじまるソ連の七十年余りの歴史の中で「スターリン時代」は極めつきの暗黒時代であった。今日大体明らかにされた「粛清」はもちろん、収容所とか強制労働、KGB（当時はゲーペーウーと言って恐れられていたなどなど、その内部は闇の中であった。したがって、クーデンホーフ伯の語る「真相」に私は非常な好奇心を持った。

今日改めて考えてみると「スターリン」が暗殺されたかどうか、それにはクレムリンの医師団が干与していた、などという話は、たいしたことではなかった。重要なことは、スターリンの死と共にクーデンホーフ伯が語った「全体主義国家」というものの「正体」とその恐怖、それが「人間」をいかに変化させるか、ということであった。

そこでは、人間は「生きて行く」ために、非常に多くのことに耐えなければならず、それどころか多くの場合マインドコントロールされ、全体に「迎合」して個人を殺し、体面も生き方も、つまり人格にともなう何もかも国家に従属することを強制される。そしてやがては独裁者に忠誠を誓って、そのために死んでもいい、と思うようになるまで、変えられてしまうのである。それがいやなら反抗して投獄されるか、国家の最高権力者を殺して体制を変えるか、さらにはその国から脱出するか、などであろう。事実、クーデンホーフ伯はナチス・ドイツの支配下におかれたオーストリアから脱出してアメリカに亡命し、コロンビア大学などで全体主義国家の悪を説きつづけたのである。

この体験から生まれたのが「人間対全体主義国家」という書物であり、鳩山一郎先生が訳され「自由と人生」という書名で公にされたのである。

歴史的に見て、全体主義国家の例は無数にある。二十世紀に限っただけでも、ムッソリーニのイタリア、ヒトラーのドイツ、一九一七年以来のソ連、毛沢東の中国、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、カストロのキューバ、ホーチミンのヴェトナム、ビルマ、共産主義体制下のルーマニアやチェコスロバキアなど東欧のほとんどの国がそうであった。

わが国の場合でも、何時からという時代区分となると難しいが、日中戦争から太平洋戦争の終結までは明らかにそうであった。私自身、二十一歳で終戦を迎えたが、それまでずっと国のためなら死んでいいと本気で考えていた。東条首相暗殺計画というものがあったし、ドイツのヒトラーにも未遂に終ったが同様の事件があった。

アメリカの場合もリンカーンやケネディ兄弟など政治テロはあったが、全体主義国家でなかったということが決定的に違っている。中国の場合、台湾で李登輝総統が選挙で選ばれた時、ある外国の新聞が「中国五千年の歴史で初めて最高権力者を人民が選んだ」と書いた。そこでは、現在の全体主義国家で「形式的」に行われている「選挙」なるものを、民主主義に基づく選挙とは考えていないことだけは確かである。

このマークは、同志の絆として用いられて来ました。左半分はローマ字のUでYou（あなた）を意味します。右半分はIで、I（わたし）を意味します。

左右をあわせるとWで、あなたとわたしが固く手を結び合うWe（私たち）とWorld（世界）を意味し、私たちの手で世界を築こうという意味を表しています。

## 静和

◇前半豪雨、後半空梅雨のような天候です。有珠山の爆発、三宅島の噴火、神津島の地震。その他、薬品・食品に対する異物混入、食品会社の不注意による食中毒などなど。これだけ短期間に天変地異初め各種事故が続くとお払いでもしたい心境になります。天災は致し方ない面があるものの、事故は予防の方法が無いものかと考えます。

◇六月二十五日実施の衆議院議員選挙では、どの政党も勝たないという微妙な民意が反映されました。投票の余韻覚めやらぬ日に元中尾建設大臣が逮捕されました。政界にも大激震が走りました。性懲りも無くこの種の事件が後を絶ちません。ますます、政治に対する不信感が募り、国民が政治に対する信頼を失っていく事件になっています。

◇選挙の結果を受けて第二次森内閣が発足いたしました。七月四日は、夕方から土砂降りであり「改革実行型の内閣」と森総理が位置付けていますが、「土砂降り内閣」とも言われ先が見えないとされている面があります。政治に対する信頼を取り戻すために相当の覚悟と実行が求められます。

◇古来から和顔愛語（わげんあいご）と言われ、如来の悟りを持った穏やかな顔をして、誰にでも分かりやすい言葉で語る、と言われています。分かりやすいことを難しく語り、済ました顔で悪い事をしている。もっと正直に国民のために行うことこそ国民の信頼を得る道です。

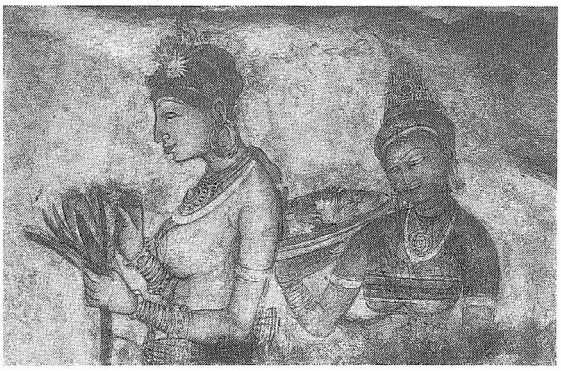
〈長〉

# ワールド見聞録vol.3

## 貧しさ、豊かさ？

### スリランカがODAに求めるもの

鶴巻克雄



スリランカの壁画

日本はODA援助では毎年一一二位を誇る援助国であり、世界中の大多数の国で日本からの援助プロジェクトにお目にかかることができるし、被援助国の人々から感謝の言葉を聞くことがある。そんな時日本人としてちょっぴり誇らしい気になったとしても「いい気になるな」なんて咎められることはないだろう。

援助のあり方については種々の議論があり、現地高官、政治家の懐に入ってしまう、必要度の低いものに多額の資金が使われている、日本の商社に金が還流していて現地は豊かになっていない、民生にあまり役立っていない、などなど正に百家争鳴。たしかにダム、発電所、道路、港湾設備、といった巨大プロジェクトが目立ち、民衆が直接恩恵を受けられる病院、学校、などのプロジェクトは少いようだ。しかし、これらの援助は日本が一方的に決めるのではなく被援助国がそれぞれのプロジェクトに優先順位をつけて日本国政府に申請してくる。

援助をしている国から来た日本人は全て大金持ちだと誤解されるのはつらい。日本国は援助大国であっても個の日本人はそれほど豊かではない。豊かさとは？貧しさとは？なにをもって計測するのだろう。

一九八八年スリランカを訪れた際、前歯に白斑のある歯、褐色に変色した歯、半分に折れた歯を持っている子供たちを多く見かけた。「斑状歯」と呼ばれ、過剰な弗素が混入している飲料水を飲み続けていると発症する。適量の弗素を飲料水に混ぜたり、歯磨剤に混ぜて使用することにより「むし歯」を予防する効果があり、アメリカをはじめ多くの国で水道水に添加している。使用量によっては薬にも毒にもなる典型的な見本といえよう。

井戸と川から飲料水を得ている地域で発症し易く、発症すれば食物摂取に障害があるばかりでなく容貌が醜くなるため就職、結婚などの障害になり社会問題となるので治療と予防の必要がある。

飲料水から弗素を除去するには数億円のプラントを設置すれば簡単に除去できるとの回答を水処理会社から得たが電気もあるかどうかも解らない地域で一つ一つの井戸にそんな大掛かりな装置を設置することはできない。世界中で初めて歯科大学の移転新築がJICAのプロジェクトで完成した国であっても国からの申請が出ない以上ODAの対象にはならず、草の根援助の出番となる。

飲料水中に含まれている弗素の量を調査、除去可能な装置を開発するために一年間に、US$二〇〇〇を五年間継続、合計US$一〇〇〇〇を支援することにした。

そんな小額の金ではプロジェクトの継続さえ難しいのではないかと思われたが保健省の部長級の歯科医師の月給がUS$一〇〇―一五〇の国では決して小額とは言えない。

結果、焼いた獣骨、小石、砂などをいれた塩どのパイプで飲料水を濾過することによって弗素を除去することが出来るようになった。斑状歯が予防出来たと結論ずけるまでには時間的に無理であるが、US$六で作られた濾過装置を設置した家庭ではカレーの味が良くなったと主婦からの評価は高い。

月給$一〇〇では海外に個人で出て来ることは難しい。ホテルに宿泊すれば二ケ月分の月給が一泊で出ていってしまう。これはどう考えても豊かだとは思えない。

そのような国で個人宅に招かれる。月給$一五〇の人がサッカーの出来るような広い土地、家に住み、車に乗り、メードさんを雇って快適な暮らしを楽しんでいるではないか。出される料理は客をもてなすためとはいえ豊富な材料に独特なスパイス味。

約十倍ちかい収入があるとほいえ猫の額のような狭い土地、ウサギ小屋のような家で掃除、洗濯、料理を人頼みにできず、高い物価で朝から晩まで仕事に追われている現状は豊かだという実感を持つことは出来ない。

あまり豊かさを感じていない者が、貧しい国に数えられてはいても豊かな生活をしている人々を支援をするため、「飲料水から弗素を取り除く」ワークショップ開催の知らせにまた飛び出して行く。

歯科医師、都内に診療所を開業。友愛青年同志会では結成の翌年から常任幹事となり、その後常任参与・相談役を務めるなど、友愛活動のベテランでもある。また、一九九七年から一九九九年まで国際歯科連盟（FDI）の会長を務める。在任中に世界各地を訪問し、これまでに訪れた国は延べ六十七国にのぼる。その経験から、行く先々で感じたことをエッセイ風に連載して頂く。

---

長岡のホームステイ先

## 楽しかった日本のホームステイ

### ドイツの学生さんから手紙

冬季長野オリンピックの時に友愛山荘を利用していただいたドイツのスポーツユーゲント団長ヨハン・アウバルト氏の紹介で、今年三月―四月末まで友愛の地方会員の所でお世話になったクリスティアーネさんから手紙が届いた。

◇

《グデンタグ》はドイツ語で《こんにちは》です。大学の町に帰る前に一週間ぐらい両親の所に泊まりました。二週間前にバイトロの大学に帰りました。

ところで、先週友達を呼んで日本の旅行についてパーティーを開きました。お寿司を作ってお茶を飲んで日本の写真をみました。とても楽しかったです。みんなは日本に行ったことがないからたくさん説明をしなくてはなりませんでした。写真をみたら本当に懐かしく日本に帰りたい。日本はとても面白くて楽しかった。友愛のメンバーのお陰で色々なとこにいき、やさしくて親切な日本人に沢山会いました。大学で日本人留学生に、毎週会うので会話をするチャンスがあります。みんな私が日本語が上手になったことをびっくりしてました。（面白かった）大学の日本語の授業のために日本の文化と日本の風俗についてレポートを提出しなければなりません。とても難しいけれど、日本でホームステイの時、沢山いろいろなことを覚えました。その経験を書きます。

終わりにもう一度「どうもありがとうございました」ヨーロッパに来たらドイツに来てください。私が案内します。

お元気で。

Christiana Koemen

---

## リートコングール　優勝者ウィーン訪問記

増田弥生さん

今回、「友愛ドイツ・リート歌曲・コンクール」にて優勝をいただくことが出来、その上、私が一九九六から一九九八の約二年間留学生活を送ったウィーンでコンサートに参加させていただく事が出来ました。このことに関しては、審査員の先生方、友愛事務所の方々、そして：OJABの皆様一人一人に厚く感謝申し上げます。

さて、ここに、素晴らしくもとてもエキサイトしたウィーンでの研修旅行及びコンツェルト・ハウスのシューベルト・ザールにおける私たちの演奏会について少しお話したいと思います。三月二十五日の出発前は、喜びと嬉しさのあまり小さい子供のようでした。留学当時を懐かしく思い出し、皆に再会できること、そして、このような立派な形で舞台に立てることがとても幸福でした。が！ウーンに着いた直後のオーケストラ・プローベに行ってびっくり！三十日が本番というのに、皆、オーケストラのメンバーは初顔合わせだというのです。皆、忙しい中をぬっての練習で、初見状態の学生も多かったのでしょう。音はバラバラ…。私も心配で心配で、旅の疲れも重なり、その夜、ホテルのベッドでぐったりしたのは言うまでもありません…。

二十七日は、ピアニストのワルター・モーア先生との合わせのため先生のスタジオへ。ウィーンのリング内（旧市街）にある、とっても素敵な雰囲気の広々としたお部屋でした。モーア先生は、私が、ウィーン国立音大声楽科・リート・オラトリオ科で学んでいた頃から知っていましたが、共演させていただくのは今回が初めてで、たいへん楽しみでしたし、光栄でした。ブラームスの歌曲を四曲、御一緒させていただきましたが、先生の一流の技術と感性、解釈に支えられ、私の歌いたいという欲求は高まり、伸び伸びと合わせを終えられました。

その晩は、コンツェルト・ハウスの大ホールで開かれたコープマン指揮のバッハ「マルクス・パッション」を：OJABの御招待で聴きに行きました。滅多に聴くチャンスのない曲目ですから二十代前半で、現在、コンセルヴァトリウムなどの音大に通っている若者です。皆、とても親切で色々と話しかけてくれるものです。こうやって、すぐに打ち解けられるのも、音楽を通してだからこそ。本当に音楽に国境はないのだなぁと感じます。

二十九日、コンサート前日。

この日は、明日によいよコンサートということで、私もウィーンの友人達に電話したり体調を整えたり（友人の家にお風呂を借りに行き、マッサージもしてもらいました！）楽譜とにらめっこしたり、イメージ・トレーニングしたりとゆっくり過ごしました。夜からオーケストラ合わせ。四日前に会った時とはメンバーの顔も何となく違い、皆が明日の本番へ向けて一つのよい方向へ走っていることが分かります。仕上がり具合も良く、まとまりも出て来て、私も安心して休むことが出来ました。

三十日、いよいよ本番！

お昼は、私もふんばっての歌のオペラ・アリアに驚いた様子でした。

は、とても美しい明るい黄色に修復されておりますます輝きを増しておりました。前半のブラームスの歌曲は、やはりとても緊張して今いち伸びやかさに欠けたかも分かりませんが、後半はリックスして、オーケストラと共にいきいきとしたモーツァルトを演奏出来ました。やはり、オーケストラと共に歌うと気持ちの良さは格別です。留学中は、ほとんどリートとオラトリオばかりやっておりましたので、ウィーンの知人達は、私の歌うオペラ・アリアに驚いた様子でした。

（モーア先生も！）私の成長した姿を見ていただける機会が、ウィーンでこれからもありますように心から願っております。

また今回は、同行して下さった島崎先生、野中先生にたいへん感謝いたします。特に島崎先生はお忙しい中を毎日ように果物の差し入れやアドヴァイス、そして、色々とお話をして下さったり、お薬をいただいたりと、たいへんお世話になりました。最後になりましたが、ここに改めて厚く御礼申し上げます。

Danke schön!

# 映画雑感

井上和子

(3)

友愛の常務理事である井上和子さんによる連載の第三回目。映画が大好きな井上さんに映画や映画を通して出会った人々との触れ合いについて綴って頂く。

◇

今回は、私のお薦め映画を二本御紹介しようと思う。

一本は、本年度のアカデミー賞「最優秀外国語映画賞」を受賞したスペイン映画『オール　アバウト　マイ　マザー』、そしてもう一本は、香港映画『玻璃（ガラス）の城』である。

映画はやはり映画館のスクリーンで観ていただきたいと思う私にとって、御紹介するには、新聞発行後も上映していなければ意味がない。問い合わせたところ、両作品共七月末まで確実に上映するとの返事であった。興味を持たれた方は、ぜひ足を運んでいただきたい。

『オール　アバウト　マイ　マザー』は、アカデミー賞を含め数えきれない程多くの映画賞を受賞し、またタイム誌が選ぶ一九九九年度年間映画の第一位に輝いた感動作である。タイム誌は「この映画を観て何とも感じない人は、心臓専門医に診てもらうことをお勧めする」とまで評している。また、「この映画を観て、生まれて初めて〝今度生まれてくる時は女性でもいいかも〟と思った」と言う劇作家の言葉や、「女である事がこんなに嬉しく思えた事はない」と言う女優の言葉に、私は限りなく共感を覚える。

「まだ見ぬ父親にひとめ会いたい」と言う想いを抱いたまま事故死した息子。女手一つで彼を育ててきた母親は、息子の想いを伝えるべく、行方不明の夫を探す旅に出る。その旅の途上で彼女が出会う人々は実に様々である。同性を愛する大女優、女になりたかった男、男に捨てられた修道女。彼等の悩み多き人生を自分の人生として引き受けながら、自らも癒されてゆく。人は他人の痛みをどれだけ自分の痛みとして感じる事ができるのだろうか。スペイン女優の豊かな表情に圧倒されながら、そんな事を深く考えさせられる映画であった。

もう二本の映画『玻璃（ガラス）の城』は、これとは全く趣を異にした美しいラヴ・ストーリーである。監督のメイベル・チャンは『宋家の三姉妹』でも知られている。（岩波ホールでロングラン大ヒットを記録。今回の作品も同ホールで上映中）

十代の頃に大学のキャンパスで出会い、恋におちた一組の男女。その二十年に及ぶ紆余曲折の物語が、美しい音楽と共に綴られてゆく。この音楽が実に素晴らしい。私の学生時代の思い出と重なるフォークソング・グループ、ブラザース・フォアの「トライ・トゥ・リメンバー」が物語をさらに盛り上げる。二人が知り合い、愛を深めてゆく香港大学でのエピソードの数々は、どこか懐かしく、古き良き時代を思わせる。実際に青春時代を香港大学で過ごした監督自身の想いも伝わってくる。スクリーン上には絵画のような光景が次々と写し出され、観る者を魅きつけて離さない。時にはこうした気持ちの良いラヴ・ストーリーを観て胸をあつくするのも良いのではないだろうか。

## 息子を失った母の物語

「オール　アバウト　マイ　マザー」「玻璃<ガラス>の城」

## 心温まるラヴストーリー

# 友愛ネットワーク

## 草の根国際交流で伝統文化を紹介

和歌山　塩崎りか

全国各地の友愛関係者に地域の近況を報告していただくシリーズ。第二回目は、和歌山県でドイツ学生を受け入れた塩崎りかさんより原稿が寄せられた。

私が友愛の活動に最初に参加させていただいたのは、第十一回友愛国際青年会議の歓迎レセプションが鳩山会館で行われた時でした。何も分からないまま参加したのですが、いろいろな国の同世代の人との交流が持て、とても有意義な時間を過ごすことができました。

その後、軽井沢でのJICA合宿セミナーに参加させていただき、中国青年とのディスカッションやレクリェーションを通じて、交流を深めました。特に、教育に関して、日本と中国の違いや、文化や風習を学べたことが大きな収穫となりました。

この合宿セミナーでのわくわくするような経験がきっかけで、私の知らない国のことをもっと知りたい、交流を深めて相互に理解しあいたいと、強く思うようになりました。

そんな時に、友愛の関係でドイツ人の学生（クリスティアーネ・ケーメンさん）を一週間、我が家にお招きすることになったのです。そこで、私の町の暮らしを知ってもらうべく欲張りな一週間を計画しました。

まず、私の母校の剣道部や箏曲部の協力を得て、日本の高校生活の部活動を見学しました。次に、お寺での座禅、茶道や華道を体験してもらい、日本の伝統的な文化を紹介しました。また、市内の幼稚園の訪問や、老人施設の慰問も行いました。子供達にとっても初めて接する外国人ということで、言葉の違いなどに最初は戸惑ったようでしたが、すぐに打ち解けて楽しく過ごすことができたようです。最後のお別れの日には、たくさんの方々が我が家に集まってくださり、ドイツワインでクリスティアーネさんとの別れを惜しみました。

私の住んでいる和歌山県は、近畿地方南端で南紀白浜や弘法大師ゆかりの高野山、古来からの熊野古道での熊野信仰の那智大社などの歴史的な名所が数多くあります。日高・御坊市は歌舞伎で有名な娘道成寺があり、また醤油の発祥地でもあります。人口は、三万人にも満たない小さな市なのですが、歴史的に自慢できるものがたくさんあります。それに加えて、きれいな海や山がすぐ側にある自然にも恵まれた場所です。クリスティアーネさんにも「素晴らしいところだ」と喜んでいただけ、私自身も非常に嬉しく思いました。

そして、和歌山の人の温かさに触れてもらえたことは、まさに友愛の「相互理解」「相互尊重」という精神に通じるものだと感慨の気持ちでいっぱいです。今回の受け入れは非公式ではありましたが、私や周りの人々にとっても大きな財産となりました。

これからも、草の根運動として外国の方々との交流の機会を多く持てるよう、地道な活動を和歌山から世界に向けて発信して行きたいと思っています。

よい子に囲まれてヒナ祭を祝うクリスティアーネ

## 中央公論ビル　知的文化が花開いた場所

近代的な建物が並ぶ東京都内にも、歴史的な建築物は意外と多い。ここでは、そのような建物にまつわる様々な思いを紹介する。今回は、エッセイストの宮田毬栄さんにご自身が勤められた中央公論社の建物について紹介していただく。

私が中央公論社に入社したのは、一九五九年四月のことだった。大学を卒業してすぐ、私は中央区京橋二丁目八番地にある、個性的な中央公論の社屋に通うことになったのである。

銀座通りと昭和通りに挟まれた中央公論ビルは、建築家芦原義信氏の設計により、一九五六年に建てられた。シンプルな外観は二十世紀後半に向けて、日本の知的文化を担う出版社を象徴するにふさわしい、節度のある現代性にあふれていた。

中央公論社の名が刻印されたたずまいは、私の記憶のなかに永遠のものとして生き続けている。あのガラスの扉を開けて、昭和を代表するどれだけ多くの芸術家や学者や政治家、著名な言論人、ジャーナリスト、演劇人、スポーツマン、などが来社されたことだろう。

私の関心からいえば、入社した頃、文学史上の人としか思えなかった谷崎潤一郎氏、正宗白鳥氏、川端康成氏などを受付で目撃し、雷に打たれるほどの緊張を覚えた。

地上七階、地下一階からなる建物は、九十年代においても、十分斬新で、言論・文芸ジャーナリズムをリードする出版社らしい気品や雰囲気が漂っていた。

半世紀にわたる歳月が社屋のあちこちに傷みを与えていたとはいえ、私たち社員にとっては、誇りをもって仕事に励んだ、愛する城だったのである。二〇〇〇年の区切りの年に、時代に適応できずに建物が解体されようとは、だれが想像しただろう。

イギリスの半地下みたいな、小さな厚いガラスがはめこまれた地下一階には社員食堂があり、そこに行けばだれかと親しく話ができるといった、和やかな雰囲気が漂っていた。

大岡昇平氏、吉行淳之介氏、遠藤周作氏、島尾敏雄氏、開高健氏、辻邦生氏などと打ち合せをした〝プルニエ〟での時間が、逝ってしまわれたこれらの作家たちの思い出と共に甦ってくる。

## シンプルな外観と繊細な内装　社員にとっては〝愛の城〟

宮田毬栄

六十年代の中頃から、経済の高度成長にあわせて全集ブームが始まり、中央公論社からは、「世界の歴史」「日本の歴史」「世界の文学」「日本の文学」という、他社の追随を許さない名シリーズが次々に刊行され、社員の数は急増していった。

大人数の社員に対しては、もはやサロン的な食堂は用をなさず、食堂は閉ざされたが、七階には来客の接待や仕事の打ち合せのために使われる、かの有名なレストラン〝プルニエ〟の出店もあったのである。

七階にはまた、〝中央公論画廊〟があって、記念すべき個展やさまざまな催しが行われた。この階で忘れられないのは、〝プルニエ〟と〝中央公論画廊〟の間に位置するロビーである。いつも静謐なロビーには、バルコニーが作られており、バルコニーには美しい形の石のテーブルが装飾として置かれてあった。石造りのテーブルには直径二十センチくらいのへこみがデザインされていた。

雨の日、窓辺のソファーに深く腰かけ、強い水滴が落ちるバルコニーを眺めるわずかの時に、私はどれだけ慰められただろう。削られた穴に雨水がたまり、その水をめあてに、スズメ、ツバメなどの都会に住む鳥たちがやってくることがあった。それは、いくら眺めても飽きることのない風景なのだった。

あの石造りのテーブルをデザインしたのはだれだったのだろう。作者は浅い水たまりに遊ぶ小鳥たちの姿を心に描いていたのだろうか。

編集室も思い出深いけれど、私にとっては、あのバルコニーの、ファンタスティックな小空間が失われてしまったことが、何よりも悲しいことなのである。

……

**エッセイスト**。一九三六年、東京に生まれる。早稲田大学仏文科卒。中央公論社に勤務。文芸雑誌「海」編集長、書籍編集部部長、中公文庫副室長、「中央公論文芸特集」編集長などを経て、雑誌編集局次長を務める。九七年に退社。現在フリーで活躍中。

# 友愛国際ネット勉強会 第5回

恋する対談

## 篠原弘子さん・井上和子さん

〝映画の魅力について〟

六月三日、第五回友愛国際ネット勉強会が行われました。今回は「プエノスアイレス」「恋する惑星」、「天使の涙」等香港映画を中心に映画を配給している㈱ブレノン・アッシュ代表の篠原弘子さんと、「友愛新聞」の記事を寄稿されている井上和子氏（日本友愛青年協会常務理事）をお招きして対談形式で講演して頂きました。お二人のトークは軽快に進行し、短く感じられる二時間半でした。

先日行われたカンヌ映画祭についての話から始まりました。カンヌ映画祭と聞いて私の頭に浮かんだのは、叶姉妹と中村江里子とか大島渚監督「御法度」くらいのことでした。実はカンヌ映画祭というのは、あの華やかなソワレ（夜のパーティ）だけが有名ですが、実際には映画に始まり映画に終るといわれる様に朝八時半から試写が始まり徹夜して映画に没頭するフェスティバルなのです。カンヌ祭の華やかな一面だけでなく、早朝から活動をしているという、映画配給会社や映画関係者の地道な活動の裏側を垣間見ることができたのは収穫でした。

篠原さんは、大学を卒業後、西武百貨店でOLをされた後、NY大学へ留学、事情により帰国、フリーで企画活動をし、その間に映画に関わることになったそうです。映画好きの仲間と企画した香港ツアーで、五日間に映画三十五本を観るという驚異的な映画漬けの日々を送り、そこで香港映画の素晴らしさに触れ、帰国後には「香港ニューシネマ・フェス'89」と云う映画祭を開催するほどの熱の入れかたでした。

彼女は事もなげに笑いながらご自分の軌跡も話してくださったのですが、そのいずれにもなかなかの苦労が伴ったことが推察されます。香港映画が面白いと思っても借金をして会社を起こしてまで、日本に香港映画を輸入しようとしたのは何故でしょうか？日本の人に香港映画から受ける人間としての純粋なこころと情熱を若い人達に伝えたいと思う気持ちがその行動力に走らせたのではないでしょうか！

彼女は良い映画を多くの人に観せるために、これからの人生を使おうと決めておられます。

「私は〝プエノスアイレス〟に夢中になって同じウオン・カーウァイ監督の〝恋する惑星〟や〝天使の涙〟を見ました。でも〝天使の涙〟は残念ながらついていけませんでしたけれども、篠原さんのように私も力を注げる何かを見つけ、情熱を燃やしてみたいと思います」と井上和子氏は語られました。

これからの人生を考える上で非常に有意義な講演でした。

〈文責：大野晋〉

# 友愛婦人会総会を開催

あじさいの便りもそろそろ、という六月七日、友愛婦人会の総会がシビックセンタースカイホールで行われた。

十一時、壇上の花々が来場者に微笑みかける中開会。

司会者は水口運営委員。

開会の辞を種田副会長が「婦人会の事業がスムースに進行している、友愛新聞も毎回会員への発送をお手伝いし寄稿依頼があれば原稿を寄せている」などを簡単に織り込んで挨拶する。

続いて会長。

はじめに昨年十月七日に行った行事の際の会員の心遣いに対するお礼を述べられたあと、「三十三年に始まり、四十二年間の中でもこの一、二年は、内容の充実した事業を地道に積み重ねて来てくれたことは真に喜ばしい。ボランティア活動にも力を注ぐ一方、教養方面も一層充足させたい。併せながらこの半年間に大きな事件が続出、子どもの事件は大人の責任である。友愛の精神を発揮し、協力しあって救済の手段を考えよう。なお午後からは介護保険のお話があるので、ゆっくり聞いていって下さいと、ご挨拶があった後、議事に入った。

議長選出。司会者一任の声で、駒込支部長の柿沼氏が議長席へ。

煙山書記が事業報告を、重要部分のみ読んで説明、平成十二年から「ゆうあい」新聞に婦人会が協力していくこと、「くすのきの郷」のボランティアに参加したことを付加えた。

続いて決算報告を神保会計と大川会計が読み、諏訪監事が監査報告をし、全員拍手して承認した。

新役員紹介を倉林副会長。

十二年度事業計画案は榎委員が読み上げた。

閉会の辞を倉林副会長が述べ、総会は流れるごとくスムースに、時間通り終了した。

これより軽く昼食タイムに入る。昨年好評だったサンドイッチとコーヒーまたは紅茶というメニューである。

静かだったスカイホールがざわめいて、サンドイッチやコーヒー、紅茶が配られる。席を立つ人、移動する人さまざまである。

相変わらずサンドイッチの人気は上々で、友愛総会の定番になりそう。

一時より午後の部開幕。

講演会「介護法について」。講師は文京区役所の介護支援課、稲垣主査である。

過去介護法について二十六回講演して来たという、福祉政策のベテランで、水色のYシャツが印象的。

パンフレット「わたし達の介護保険」を基に、もう一つ掘り下げて、噛んで含めるように解説してくれた。

質問タイムに再びコーヒー、紅茶のサービス。

ヘルパーの資格がある人が、自分の家族の介護をしても保険は下りない、という話に、「では、お隣のお嫁さんにうちのおばあちゃんを介護して貰って、あたしはお隣のおばあちゃんを介護するっていうのはどうですか」との質問に、「結構ですよ、それならばっちり保険は下ります」とニコニコ。

皆もどっと笑いが来て、和やかな中に一つ賢くなった思いで講演会は終った。

閉会の辞を、富坂支部の白石支部長が述べた。

## 賛助会員登録と新聞講読の御礼

賛助会員へのご登録、どうもありがとうございました。

成毛典子、仲谷邦彦、高野常夫、六甲商会、池田富保、大伴忠、木村菊郎、海野哲聖、太田清蔵、煙山力、西村澄子、中村明彦、井染清子、星合尚、増岡聡一郎、中村芳枝、岡田精助、山崎栄、矢吹和重、渡辺久美子、森田忠雄、岡孝一、中島厚子、郷啓子、福井直祥、豊島豊太、鈴木咲子、橋本晃和、小日山早智子、浜辺肇子、長瀬二郎、藤平清貴、近藤組、樽井宏、伊藤萬太郎、梶谷エンジニア（株）、中里盛人、細木悦子、相沢英之、井上尹、本多峯子、種田英子、倉林鳶枝、大山景明、毎夕新聞印刷、北村哲男、池本雪江、中村博彦、奥村璎子、佐藤利幸、川辺辨、松室かう、富永克子

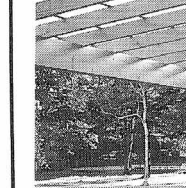
（順不同敬称略）

新聞のお申し込みをいただき、どうもありがとうございました。

小野田隆、松本悦子、佐藤泰介、池田富保、倉田秋太郎、松井壮一、吉田昌平、中村玲子、佐々木寛子、櫻井三郎、前川忠夫、長瀬二郎、大滝しづみ、岩尾慶一、藤沢勇

（敬称略）

## ◆事務局来訪



去る五月十九日、三重県議会議員の中川正美氏が友愛事務所を訪れた。中川氏は長田事務局長と懇談し、友愛活動のさらなる発展に期待を表明した。

## 中央日誌

五月～六月

五月十日（水）第三六五回友愛クラブ定例会／講師…伊東弘泰先生（日本アビリティーズ協会／専務理事）「介護保険の現状と福祉政策の問題点」

五月十二日（金）日中友好協会打合わせ

五月十三日（土）友愛国際ネット第四回定例会／中国語研修

五月十八日（木）JICA事前研修会

五月十九日（金）JICA開講式

三重県議会議員・中川正美氏来局

五月二十二日（月）第五十九回理事会

第五十回評議員会

五月二十三日（火）婦人会・運営委員会

五月二十四日（水）JICA都内プログラムスタート（三十日まで）

五月二十六日（金）～二十八日（日）JICA合宿セミナー（軽井沢友愛山荘）

六月三日（土）友愛国際ネット第五回定例会／ゲスト：篠原弘子氏、インタビュー：井上和子氏

六月七日（水）友愛婦人会総会

六月十一日（日）JICA送別会

六月十二日（月）JICA閉講式

六月十四日（水）第三六六回友愛クラブ定例会／講師…有馬尉彰先生（東急ケーブルテレビ）「多チャンネル時代を迎えて」

六月十二日（木）総務庁連絡会議

六月二十七日（火）婦人会・運営委員会

六月二十九日（木）日中友好レセプション

## 〈友愛クラブ〉ゴルフコンペ復活

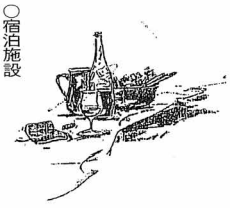
友愛クラブゴルフコンペが復活した。復活第一回目は、六月二日岡部チサンカントリークラブで開催された。今回の優勝者は、川辺氏。今後は、年二回のペースで行っていく予定である。賞品ではないが、優勝者には記念のレプリカ杯が贈呈される。また、ゴルフ終了後、お茶を飲みながらの反省会兼親睦会も行われる。

次回の日程は未定だが、十月頃軽井沢友愛山荘に一泊して開催する予定である。勇性の会員はもちろん、女性の方のご参席も大歓迎。

レプリカ杯は中川氏によって寄贈された。

（世話人：鶴巻、中川）

# 軽井沢山荘 利用者を募集！



○宿泊施設
最大収容人数40名
和室（10畳）　6室
和室（4.5畳）　1室
洋室（Twin）　2室

○利用施設
テニスコート
会議室

○利用料金
金額は食事込み（朝夕食付き）一人当りの料金です。（消費税は別途頂きます）
和室（10畳）一般7200円、団体10名以上6600円、学生6600円、団体10名以上5700円
洋室（Twin）8500円

＊賛助会員の方は団体料金となります。

＊宿泊利用者は附帯施設が利用できます。（自転車・バーベキューセット・ピアノ・テニスコート・会議室）

詳しくは、友愛事務局（03－5684－3188）まで。